

# スタジオ夜話

第59話 スタジオ夜話 (番外編)

## サウンドドラマの制作

モニタリングの重要性と今後 II

### ☆ はじめに

いよいよ春の訪れを感じる季節となってきたのですが寒い日が続いています。読者皆様はいかがお過ごしでしょうか。筆者のいる伊豆では多くの早咲きの桜があり既に開花しているものがあります。実は10月桜なるものもありこの種のは10月と4月の年2回開花することです。早咲きで有名な河津桜もこれからが見頃かと、伊豆ではこれから5月まで様々な桜が楽しめます。昨年のスタジオ夜話では編集部M氏が緑色の桜「御衣黄（ぎょいこう）桜」を写真付きで紹介してくださいました。4月中頃には開花する桜です。是非お出かけください。

さて今回のスタジオ夜話番外編、モニタリングの2回目になります。モニタリングの重要性は言うまでもなく、創り手、聞き手を問わず最終的に作品鑑賞の要となる所です。今回もスタジオ夜話的にお話したいと思います。お付き合いください。

### ☆ 都合の良いレンジで創る？ I

前回ダイナミックレンジのお話で再生可能なレンジ（範囲）には限界があるというお話をしました。ダイナミックレンジ90dB以上どころかモニタリング再生という点から考えると録音のピークレベルを最大値とするとその音がモニタリング環境で歪なく、聞くに堪えない大きさでなく大きく聞こえる設定にすると、そこから下90dBは、たぶんモニタースピーカーからは音が小さすぎて聞こえません。前号でもお話をしました。重要なポイントです。

私たちがサウンドドラマなどを創るときダイナミックレンジ90dB以上というレンジは作品の制作ミキシングレンジではないことに気が付かなくてはなりません。

音楽CD制作では、演奏上の一番大きな音（若干のマーゼンは想定するものの）を記録、伝達媒体の最大値に設定しても、一番小さな演奏上の音もアンサンブルという観点からモニター上、聞こえなくならないというお話をしました。

演奏上の最大音が心地よく聞こえるモニターセッティングをしてください。

ミキシングエンジニアも最大値をピークに、アンサンブルを考えたミキシングを心掛けていただければ作品は完成します。

しかしサウンドドラマ制作はそう単純ではありません。なにしろ相手にする音は小さな秋の虫の音色から落雷の音まで扱います。

音どうしのアンサンブルなど期待できません。まさにダイナミックレンジ90dB以上の音を相手に制作作業をしなくてはならないのです。

そこで筆者はミキシング作業でのダイナミックレンジをモニタリングでのレンジを考えた収録を意識することが重要であると結論しました。モニタリングするのに都合の良いミキシングです。

以前は録音媒体や機器のSN比やダイナミックレンジが問題となっていました。デジタル機器全盛の今日こうした問題は話題にも上りません。レンジもとにかく周波数特性も20KHz以上はあたり前なのです。モニタリング環境もスピーカー再生は別としてイヤフォンやヘッドフォンでの再生では超高音質ハイレゾは当たり前になってきています。しかしそのソースは音楽が

大半です。

すでに読者皆様はお気づきかと思います。そこにはモニタリングレンジはあまり気にしないソースが前提であることがうかがい知れるということです。運良く？ラジオドラマを含めサウンドドラマはほとんどの音楽愛好者などには普及していません。

おかげさまで音が大きいとかバランスが悪いとかミキサーは何しているとかのお叱りは受けていないように見受けられます。

かつて録音媒体が磁気テープの時代FM放送では音のピアニッシモ部分でテープヒスが気になる。転写が気になるなどの苦情も多く、エンジニアは苦労したものでした。

それはモニタリングレンジのほうで録音機器のダイナミックレンジやSN比を上回った性能を有していたからにはほかなりません。エンジニアはあらゆる音源のミキシングにおいても自然なダイナミックレンジを考慮しながらSN比を考慮して、音源のピーク録音、ミキシングでのバランスなど苦心していたのです。

現在そのミキシングレンジの問題はどうなっているのでしょうか？

都合の良いレンジで創るという点から以前のアナログ、磁気テープ媒体では現実的にそのレンジは最大で50dB程度でした。大きな落雷をモニタリングピークに設定すると秋の虫はヒスノイズに隠れてしまいます。なんとか演出的？に回避していました。現在モニタリングピークに落雷の音を設定してもそこから下60dBぐらいまでノイズ無しに聞こえるではありませんか。モニタリングのときのレンジを考えたミキシングテクニックも以前とは大きく違ってきます。

☆ 都合の良いレンジで創る？ II

さて人間の聴覚でのダイナミックレンジは120dBと諸説ありますが、現在のオーディオ機器は概ねそのレンジを確保しているといえます。

音楽ソースのピークを聞きやすくモニタリング設定すれば、音楽鑑賞ではほぼ完璧にモニタリングできます。

よほど特殊な音楽でもなければフォルテシモから下60dBみれば再生可能です。ヒスノイズや転写ノイズもありません。

サウンドドラマもそのソースの最大値をモニターピークに設定すればその下60dB以上の音を扱うことができます。

問題はサウンドドラマの場合その中の音の最大値が台詞などと比較してどのくらいの差となるか、たとえば台詞に対して落雷との音の大きさが極端にある場合、落雷をモニタリングのピークと考えてミキシングすると台詞は極端に小さく聞こえることになります。モニタリングピークにたいして台詞はどのくらいの大きさをミキシングするのか、その作品で最も小さく聞こえる音はモニタリングレンジのどのくらいで聞こえるようにミキシングするのか。

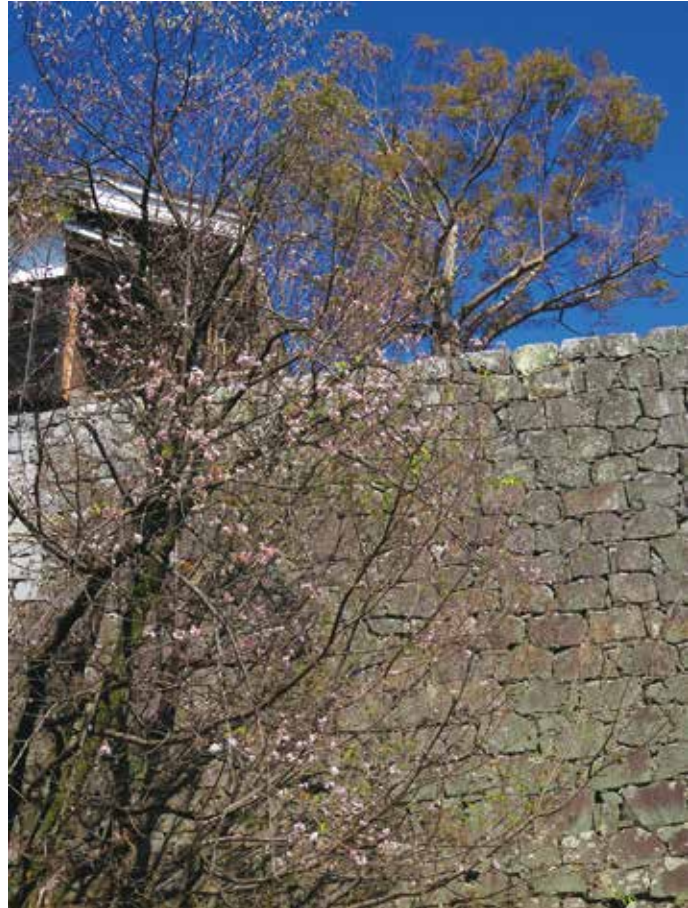
今あらためて検討する必要も考えられます。アナログからデジタル、ハイファイからハイレゾと経験してきた筆者はモニタリングピークの設定とミキシングピーク、そしてポイントはノイズのない60dB以下が使える！ということを考えてミキシングすることが重要です。

またエンジニアは不可能を可能にするミキシング上のテクニックを演出面から解決する努力も必要であると思います。作品の

内容に限らず音という側面ではその演出までもコントロールすることも担っています。

☆ 次回は

2回にわたりモニタリングについてお話をしました。音楽のミキシングとは違ったサウンドドラマのミキシングの入り口が少しご理解いただけたのではと思っています。



2015年10月、熊本地震前の熊本城内の10月桜（も）

次回からはサウンドドラマ制作ミキシングテクニックについてお話をしたいと思います。今回お話したミキシングとモニタリング、聴覚上のレンジの違いやミキシングは音の演出をすることについてより理解を深めるお話にしたいと考えています。

— 森田 雅行 —